

日本文学研究 (近代)

深津 謙一郎

前回107号の動向紹介で、文学研究と言語研究の接合面を探ろうとするいくつかの取り組みを取り上げた。

その具体的な成果の一つとして、浜田秀「目次のジャンルから見る民俗誌学—コーパスによる動態分析—」が『日本近代文学』第99集(日本近代文学会、2018年11月)に掲載された。言語行為論や認知言語学の知見を参照しながら、「民俗詩学」(ある文化に内在する「詩」ジャンルに関する常識)の動態を明らかにしようとした試みである。この中で、浜田氏自身が総括するように、コーパスの定量的調査方法によって浮かび上がる「民俗詩学」はあくまでも「抽象化」の帰結であり、調査対象となった雑誌個々の読者層やイデオロギーの問題は抜け落ちざるを得ない。いっぽう、「文化研究」以降の近代文学研究の関心は、どちらかと言えば雑誌個々の読者層やイデオロギーの実態解明に向けられており、その意味では、志向の違いが際立つ結果となった。しかしこうした「違い」の認識から、近代文学研究の今のありようを見つめなおすことができるわけで、その中心的な学会誌に浜田氏の論考が掲載された意義は大きい。

「語り論」では、第55回表現学会全国大会シンポジウム「「語り論」の新展開」が開催された。その成果は本誌108号をご覧頂くとして、近代文学研究における「語り論」の新展開を予感させるのが、小谷瑛輔『小説とは何か? 芥川龍之介を

読む』(ひつじ書房、2017年12月)である。この中では、「語り」の構造分析を採用しつつも、「語り手」を統御して表現の自己言及的な構造を編制する機能としての「作者」の分析が試みられている。芥川文学の場合、ミメシスを理想とする近代小説の規範とは逆に、「語り手」がしばしば顕在化して小説の虚構性を際立たせる点に特徴がある。既存の「語り論」では、それを十分分析できないがゆえの「作家」概念の導入であるが、小谷氏が指摘する通り、80年代半ば以降のテキスト論の展開過程で、近代文学研究が過度に「作者」を排除してきた傾向は否定できない。小谷論の試みを承け、従来の「語り論」に「作者」をどう組み込んでいくかの検証は、今後の近代文学研究の課題となる。

『日本近代文学』98集(2018年5月)では、没後100年を承けて「漱石現象」という特集が組まれた。合計8本の特集論文が寄せられた中で、北川扶生子「ジャンルの記憶—漱石における〈文〉の転位—」を紹介したい。漱石の小説では、『虞美人草』以降、言文一致体が用いられるようになったあとも、地の文の特権的な位相に漢語や漢文脈が据えられることで、小説世界の構築に効果を発揮した、という主旨の論考である。漱石に関しては、テキスト論全盛の時代に数多くの論文が発表され、イデオロギー的観点からの評価はすでにひと通り出尽くした感もある。こうした中で、近代文学研究の立場から、従来あまり活発とは言えなかった文体や修辞、語彙の次元に関する検討を試みたものとして注目に値する。

(共立女子大学)